

## 06年診療報酬改正

夜勤や準夜勤などの不規則なシフト、小さなミスも許されないプレッシャー、無理難題を押し付ける患者への対応——看護師の仕事は「白衣の天



眠っている資格いかして!

# 人材不足で 「ニーズが高まる 潜在在看護師」

慢性的な看護師不足が続く医療現場。医療の街・旭川でも看護師確保は喫緊の課題で、結婚や出産などを機に退職した「潜在看護師」のニーズが高まっている。看護の知識や技術をおさらいする研修会を実施する医療機関、働きやすい勤務シフトを導入する民間病院。眠っている資格、人材を呼び戻す動きが広がっている。

医療の街・旭川

使」とはほど遠い過酷なものだ。離職率は高く医療現場は慢性的な看護師不足の状態が続いている。背景にあるのが2006年に診療報酬の改正で

導入された「7対1の看護基準」。入院患者7人に対して看護師を1人配置する医療機関は入院基

本料が大幅に増えるという改定で、この基準導入によって病院間での看護師争奪戦が激化した。好待遇を用意する都市部の病院に看護師が集中し、地方の看護師不足に拍車をかける結果となった。

必要な看護師確保を迫られ、注目を集めるようになったのが「潜在看護師」。

でも看護師確保は喫緊の課題だ。道保健福祉部医療業務課によると、2010年12月末の旭川市内の看護師数は4290人を数えるが、看護師の都市部志向は顕著で、経験を積んだ看護師だけではなく、市内の看護学校を卒業した新人看護師も旭川で勤めずに札幌に就職するケースも多い。

そこで、ブランクのある看護師を何とか現場に呼び戻そうと研修会を開いたり、家庭との両立がしやすいような勤務形態を導入するなどの動きが広がっている。

### 技術・機器の進歩

旭川医科大学病院では、潜在看護師を対象に知識や技術を再学習する復職支援研修を3年前から年に1度のペースで続けている。

今年度の研修会は3月

4日から8日にかけて行われ、旭川市内や市外に住む20代と30代の看護師3人が参加した。

研修は5日間。初日にオリエンテーションを兼ねて医療や看護の動向、院内感染対策などについての講義を実施。注射や採血、救命救急処置など基本的な看護技術を学ぶ実技演習を経て、現場の看護師とともに病棟を見学する病棟研修がカリキュラムに組み込まれた。

2日目の様子取材した。この日は実技演習で、講師を務めるのは職場適応支援担当の菊地美登里看護師長。看護技術の基礎となる注射と採血、膀胱留置カテーテル挿入を座学と演習によって学ぶ1日だ。

現役時代には使用していなかった針に戸惑い、参加者の1人が「血液がとれません」と菊地師長に助けを求める場面も。

「針の差し方が浅いので、深さや角度、方向を変えてみるといいですよ」というアドバイスを受け、慎重な手つきで再挑戦。医療の世界は技術と機器の進歩が早い。現役時代にはなかった機器や技術に接し、参加者は少なからず戸惑う。この日は午前9時から午後1時までの4時間にわたってびっしりと実技が行われたが、参加者の表情は真剣そのものだ。

実習を終えた参加者の1人に話を聞かせてもらった。

20代半ばのAさんは1年半前まで旭川市内の病院に勤務していたが結婚・出産を機に退職。今年4月から市内の病院に復帰が決まり、これに備えて研修会に参加したという。

Aさんは1年半という比較的短いブランク。しかし不安もあるようだ。

「看護師としての経験が2年半しかなく家庭に入ってしまったので、今日、実習で学んだ技術を生かし早く医療現場に慣れたい」と緊張の入り混じった表情で話してくれた。

研修の定員は毎年5名で、この3年間で全道各地から14名が参加した。「この研修は看護師不足の解消と、大病院の役割である地域医療への貢献を目的に行っています」と稲葉副看護部長。また

菊地看護師長は「潜在看護師の中には10年以上のブランクのある人も多く、不安や戸惑いから復帰をためらう人も大勢いる。ためらう人も大勢いる。せっかくの資格を活かし、前向きな気持ちで復職できるようにサポートしていきたい」と話す。

民間の医療機関でも潜在看護師を獲得するため

## 再び離職のケースも

旭川市8条6丁目の森山山病院（森山領理事長）では同院への就職が決まった潜在看護師のために研修会を実施してきたが、現在は旭川大病院と同様に間口を広げ、復職を希望する潜在看護師を対象とした研修会を年に1度のペースで行っている。座学と実技を中心に3日間の日程で、キャリアとブランクの年数によって学ぶ内容が変わる。また家庭を持つ潜在看護師は家事や育児との両立に悩んで復職に二の足を踏むケースも多いことから、家庭との両立ができるように勤務シフトを柔軟にしたりするなどの対応策をとっている。

森山領理事長は「ブランクのある看護師を採用した場合には、一定期間はベテランの看護師とペアを組んで看護にあたるようにしています。潜在

看護師の掘り起こしに努め、地域全体に看護師を呼び戻したい」と話す。現場に戻った潜在看護師は現場で経験を積むことで勘や自信を取り戻す人が多いが、中には再び離職するケースもある。30代の看護師B子さんは、子育てがひと段落したことで復職したが、現役時代とは全く異なる医療技術や機器に戸惑い、仕事を辞めて専業主婦に戻った。「復職組は働きながら覚えなくてはならない。ブランクが長くて最新の知識についていけなかった」と胸の内を明かした。

加速する看護師不足で、潜在看護師のニーズはさらに高まるのが専門家の間でも指摘されている。慢性的な看護師不足が続く旭川でも、今後さらに医療機関のさまざまな取り組みが広がっていくと

うだ。（宮下）